

【B年】聖霊降臨節第20主日(2022年10月16日)

【旧約聖書日課】イザヤ書25章1～9節

- 1 主よ、あなたはわたしの神
わたしはあなたをあげめ
御名に感謝をささげます。
あなたは驚くべき計画を成就された
遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
- 2 あなたは都を石塚とし
城壁のある町を瓦礫の山とし
異邦人の館を都から取り去られた。
永久に都が建て直されることはないであろう。
- 3 それゆえ、強い民もあなたを敬い
暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。
- 4 まことに、あなたは弱い者の砦
苦難に遭う貧しい者の砦
豪雨を逃れる避け所
暑さを避ける陰となられる。
暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨
- 5 乾ききった地の暑さのようだ。
あなたは雲の陰が暑さを和らげるように
異邦人の騒ぎを鎮め
暴虐な者たちの歌声を低くされる。
- 6 万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜ききの酒。
- 7 主はこの山で
すべての民の顔を包んでいた布と
すべての国を覆っていた布を滅ぼし
- 8 死を永久に滅ぼしてください。
主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を
地上からぬぐい去ってください。
これは主が語られたことである。
- 9 その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。
わたしたちは待ち望んでいた。
この方がわたしたちを救ってください。
この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

【使徒書日課】

ヨハネの黙示録 7章2～4節、9～12節

²わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、³こう言った。「我々が、神

の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」⁴わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。

⁹この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

¹¹また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。

「アーメン。」

賛美、栄光、知恵、感謝、

誉れ、力、威力が、

世々限りなくわたしたちの神にありますように、

アーメン。」

【福音書日課】マタイによる福音書5章1～12節

¹イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。²そこで、イエスは口を開き、教えられた。

3 「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。」

4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。

5 柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。

6 義に飢え渇く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。

7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。

8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。

9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

10 義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

¹¹わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。¹²喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書25章1～9節

- 1 主よ、あなたは私の神
私はあなたを崇め
あなたの名をほめたたえよう。
あなたははるか昔の驚くべき計画を
忠実に、誠実に成し遂げられた。
- 2 あなたは都を瓦礫の山とし
城壁に囲まれた町を廃墟に変えられた。
他国人の城郭は都から取り去られ
とこしえに築き直されることはない。
- 3 それゆえ、強い民はあなたを敬い
横暴な国々の町もあなたを畏れる。
- 4 まさに、あなたは弱い者の咎
苦難の中にある貧しい者の咎
豪雨を逃れる逃れ場
暑さを避ける日陰となられる。
横暴な者たちの勢いは壁を叩く豪雨
- 5 乾いた土地の暑さのようだ。
あなたは、雲の陰が暑さを和らげるように
他国人の騒ぎを鎮め
横暴な者たちの歌声は弱められる。
- 6 万軍の主はこの山で
すべての民のために祝宴を催される。
それは脂の乗った肉の祝宴
熟成したぶどう酒の祝宴。
髓の多い脂身と
よく濾されて熟成したぶどう酒。
- 7 主はこの山で
すべての民の顔を覆うべールと
すべての国民にかぶらせている覆いを破り
- 8 死を永遠に呑み込んでくださる。
主なる神はすべての顔から涙を拭い
その民の恥をすべての地から消し去ってくださる。
確かに、主は語られた。
- 9 その日には、人は言う。
見よ、この方こそ私たちの神。
私たちはこの方を待ち望んでいた。
この方は私たちを救ってくださる。
この方こそ私たちが待ち望んでいた主。
その救いに喜び躍ろう。

ヨハネの黙示録 7章2～4節、9～12節

2 また私は、別の天使が生ける神の刻印を携え、日の出る方から上って来るのを見た。その天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に向かって大

声で叫んで、3言った。「私たちが、神の僕の額に刻印を押すまでは、大地も海も木々も損なってはならない。」
4 私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。

9 この後、私は数えきれないほどの大群衆を見た。彼らは、あらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手にとって、玉座と小羊の前に立っていた。10 彼らは声高らかに言った。

「救いは、玉座におられる私たちの神と小羊にある。」

11 また、天使たちは皆、玉座と長老たちと四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、12 こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵
感謝、誉れ、力、権威が
世々かぎりなく私の神にありますように
アーメン。」

マタイによる福音書5章1～12節

1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが御もとに來た。2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えられた。

3 「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。」

4 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。

5 へりくだった人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。

6 義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。

7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。

8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。

9 平和を造る人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

10 義のために迫害された人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

11 私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月16日「聖霊降臨節第20主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。日本基督教団の「新しい教会暦」の定めによる一年一巡りの最終主日で、「第20主日」とあるが主日聖書日課は「聖霊降臨節最終主日」の日課として固定されている。

・石神井教会では、伝統的な教会暦および教団行事暦で11月第1主日に設定されている「聖徒の日」の「永眠者(逝去者)記念礼拝」を10月中に前倒して執行してきたが、最近は特に「聖霊降臨節最終主日」に設定している。この主日の聖書日課が、伝統的な教会暦で「終末主日」に充てられる日課に準ずるものとして配置されており、終末的希望の中で死者の記念を行うのにふさわしいとの判断である。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、世界諸民族に対する裁き主としての神に焦点を当てる預言の箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、天上の神の御前に集められ礼拝する大群衆の幻を示される箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「山上の説教」の冒頭に置かれた「八つの祝福」の箇所。

旧約日課(イザヤ25章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典「預言者(ネビーム)」の後編「後の預言者」の第一に置かれた預言書。前8世紀末の南王国で四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に仕えた宮廷預言者「アモツの子イザヤ」の預言の書であるという標題が付されているが、この歴史的預言者イザヤに帰されるのは、本預言書中39章までと見られ、40章以下は、預言者イザヤを模範として祭司預言者の伝統を継承しバビロン捕囚を経てペルシア時代に正典編纂に携わった集団によって付加された預言集と考えられる。日課箇所は、歴史的預言者イザヤに帰される預言集に含まれる。ただし、聖書学者の中には、39章までにも後代の不可部分が含まれると推認する者がある。

・歴史的預言者イザヤの活動は、覇権国アッシリアの勢力が一時的に退いていた時代に北王国イスラエルではイエフ王朝ヤロブアム王が、南王国ユダではダビデ王朝ウジヤ王がそれぞれ40年にわたって安定的な統治を続けていた末期に始められた。しかし、両王が没するのと時を同じくしてアッシリアに登場した新王ティグラトピレセル(3世)が軍事侵攻を拡大、前721年に北王国が滅ぼされるのに続いて、南王国も属国化が進められた。この王国滅亡の危機に瀕した困難な時代に、歴代の王に政策助言をしたのが、預言者イザヤである。

・日課箇所を含む24~27章について、聖書学者の中には、「イザヤ書」全体が完成される段階で付加された預言集であるとみなす者がある。極端な立場では、この部分は、「イザヤ書」全体の中でも最も遅くに著された預言集であると考えられる者もある。「イザヤ書」全体が最終編集者の手によって修正・加筆されたとするの

は当然であるが、編集を終えた「イザヤ書」自体には一巻の「預言者の書」として意図された構成が反映されており、当該の日課箇所についても、歴史的預言者イザヤの時代背景の中で解釈されるべきであろう。

・1~39章の「第一イザヤ」は、南王国ユダの四代の王の時代を背景に活動した歴史的預言者イザヤの「預言者の書」として構成されている。この中で時代を明確にして記されているのは、6:1「ウジヤ王が死んだ年」、7:1「…アハズの治世…。アラムの王レツインとレマルヤの子、イスラエルの王ペカが、エルサレムを攻めるため上って来た…」、36:1「ヒゼキヤ王の治世第十四年…」など。日課箇所の25章は、7章で端緒が描かれる「シリア・エフライム戦争」(前734~32年頃)を経てアッシリア帝国の派遣が南北両王国におよび、ついに722年には北王国が滅亡、南王国はアッシリアに従属して独立をかううじて保っていた時期を背景として設定している。この時期の南王国はヒゼキヤを王としていたが、ヒゼキヤ王は後にエジプトとの同盟を画策し、アッシリア軍にエルサレム包囲され、滅亡の危機に晒されることになった(前700年頃)。

・日課箇所は、それより以前であるが、周辺諸国がアッシリアに完全に屈服させられた状況の中で、「都」が破壊された後、征服者によっても再建され得ない「都」において民に対する神の救いの御業がなされるという終末的表現を伴う預言として記されている。南王国の宮廷預言者イザヤの立場から解釈するならば、周辺諸国の「都」の破壊と「王国」の滅亡を目の当たりにし、自国の「都」の破壊、「王国」の滅亡さえ想定しなければいけないときに、たとえそのような事態を避けられないとしても、征服者の支配が永遠に確立することはなく、神が民を回復してくださるとの希望を抱いて、将来に対する備えを促す預言として告げられたもの、と見ることができる。

使徒書日課(黙示録7章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「僕ヨハネ」の名によって記された「黙示(=啓示)の書」で、古代教会で正典としての位置を確立したのは4世紀末になってから。「ヨハネ」は、「使徒ヨハネ」と同一視されることもあるが、「使徒ヨハネ」を指導者とした「ヨハネの教会共同体」の系譜に属する別の指導者を「ヨハネ」と称していると考えられる。形式的には、「アジアの七つの教会」に宛てた書簡の体裁で構成された骨格部分があり、これに序言や後書きを付した構造となっている。日課箇所は、4章から始まるヨハネが天上に上げられて目撃した礼拝の様子を描写する箇所。

・1~4節では「生ける神の刻印」が救済を象徴する表象として語られている。この「刻印(スフラギス)」と訳されている語は、5~6章で繰り返し現れる「封印」と訳される語と同一で、単に「印」とも訳される(ロマ4:11)。5~6章で「封印」と訳されているのと同様のニュアンスで解釈すれば、「刻印」を押された者は、何らかの神の秘儀を封印された者、という意味とも解せる。

・日課で省略されている 5~8 節には、イスラエル十二部族の名称と各部族に割り当てられた人数が記されている。この十二部族一覧は、「旧約」で描かれるどの一覧とも一致しない。

・9 節以下で登場する「大群衆」が、前段の「十四万四千人」を指すのか、それを含むより大きな集団を指すのかは、明確ではないが、4~8 節の「十四万四千人」が「イスラエルの子らの全部族の中から」の人数と言われていることを厳密に見れば、9 節の「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった…大群衆」は、「十四万四千人」の「イスラエル」に留まらない集団を意味すると解せる。「エホバの証人」では、この「十四万四千人」を「救われる者の数」と解し、自分たちの信者グループの中でもこの「十四万四千人」の中に数えられるようにと競争を促している。

福音書日課(マタイ 5 章より)

・日課箇所は、「マタイ福音書」から「山上の説教」冒頭部分選ばれている。「聖霊降臨節最終主日」にこの箇所が選ばれるのは、「終末」を「目標」と解し、「信仰の実りの刈り入れ」としての「終末」に向けて今をいかに生きるかという問いに対して、原則的なイエスの教えとして「山上の説教」を提示するためであろう。

・「山上の説教」は、主イエスが、同時代のファリサイ派系律法学者に優る「義」を目標に「律法」の実践を徹底するとはどういうことか、具体的な律法解釈と共に教えた内容となっている。その基本となる姿勢は、5:45「あなたがたの天の父の子となるため」、5:48「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」に表れていると考えられる。また、7:12「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」を「律法と預言者」の教えの究極として一般化しており、伝統的には、これをもって「黄金律」と教えられてきた。なお、「律法と預言者」の教えを集約するものとして、「神である主を愛し、隣人を自分のように愛する」を主イエスが「最も重要な掟」として提示されたことが知られているが(マタイ 22:34 以下)、これは当時のユダヤ教律法学者ヒレル派で教えられていたことであり、「マタイ福音書」は、重複することを知らながら敢えて「山上の説教」の中でも「これこそ律法と預言者」という教えがなされたことを伝えているのだろう。

・日課箇所は「八福の教え」「至福の教え」などと称される。原文を直訳すれば、「幸いな者たちは、〇〇な人々」という構文が繰り返されている。

来週の誕生日 (10月16日~22日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-169 番「ハレルヤ、主をほめたたえ」は、18 世紀ドイツの敬虔派牧師ヨハン・ヘルンシュミットが詩編 146 に基づいて作詞。曲は、17 世紀の作曲者不詳。

・21-385 番「花彩る春を」は、『讚美歌 21』編集に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讚美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、教会音楽家で合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。

・21-381 番「力に満ちたる」(= I 82「ひろしともひろし」詞)は、19 世紀英国の代表的な讚美歌作家でスコットランド教会自由教会派牧師ボナーの作詞。曲は、英国生まれでニュージーランドで音楽教授として活動したグリフィスの作曲で、I・ウォッツの詩編歌 145 との組み合わせでカトリック聖歌集(1971 年)に発表されたもの。

21-169「ハレルヤ、主をほめたたえ」

Lobe den Herren, o meine Seele

1. Lobe den Herren, o meine Seele... / ich will ihn loben bis in Tod. / Weil ich noch Stunden auf Erden zähle, / will ich lobsingeln meinem Gott. / Der Leib und Seel gegeben hat, / werde gepriesen früh und spät: / Hallelujah! Hallelujah!
2. Fürsten sind Menschen vom Weib geboren, / und kehren um zu ihrem Staub; / ihre Anschläge sind auch verloren, / wenn nun das Grab nimmt seinen Raub. / Weil dann kein Mensch uns helfen kann, / rufe man Gott um Hülfe an. / Hallelujah! Hallelujah!
3. Selig, ja selig ist der zu nennen, / deß Hülfe der Gott Jacob ist; / welcher vom Glauben sich nichts läßt trennen, / und hofft getrost auf Jesum Christ. / Wer diesen Herrn zum Beistand hat / findet am besten Rath und That: / Hallelujah! Hallelujah!
4. Dieser hat Himmel und Meer und Erden, / und was darinnen ist gemacht; / Alles muß pünktlich erfüllt werden, / was er uns einmal zugesacht. / Er ist's, der Herrscher aller Welt, / welcher uns ewig Glauben hält. / Hallelujah! Hallelujah!
5. Zeigen sich welche, die Unrecht leiden: / er ist's, der ihnen Recht verschafft. / Hungrigen will er zur Speis bescheiden, / was ihnen dient zur Lebenskraft. / Die hart Gebundenen macht er frei: / seine Genad ist mancherlei. / Hallelujah! Hallelujah!
6. Sehende Augen giebt er den Blinden, / erhebt, die tief gebeugt gehn. / Wo er kan einige Fromme finden, / die läßt er seine Liebe sehn. / Sein Aufsicht ist des Fremden Trutz: / Wittwen und Waisen hält er Schutz. / Hallelujah! Hallelujah!
7. Aber der Gottesvergeßnen Tritte / kehrt er mit starker Hand zurück; / daß sie nur machen verkehrte Schritte, / und fallen selbst in ihren Strick. / Der Herr ist König ewiglich: / Zion, dein Gott sorgt stets für dich. / Hallelujah! Hallelujah!
8. Rühmet, ihr Menschen, den hohen Namen / deß, der so große Wunder thut. / Alles, was Odem hat, rufe Amen, / und bringe Lob mit frohem Muth. / Ihr Kinder Gottes, lobt und priest / Vater, Sohn und heiligen Geist. / Hallelujah! Hallelujah!

21-381「力に満ちたる」= I 82

O Love of God, how strong and true

1. O love of God, how strong and true, / Eternal and yet ever new; / Uncomprehended and unbought, / Beyond all knowledge and all thought.
2. O wide embracing, wondrous Love, / We read you in the sky above; / We read you in the earth below, / In seas that swell, and streams that flow.
3. We read you best in him who came / To bear for us the cross of shame, / Sent by the Father from on high, / Our life to live, our death to die.
4. We read your pow'r to bless and save / E'en in the darkness of the grave; / Still more in resurrection light / We read the fullness of your might.
5. O love of God, our shield and stay / Thro' all the perils of our way! / Eternal love, in thee we rest, / For ever safe, forever blest.